

教会の生きた交わり (1)

—キリストのからだにおける一致と多様性—

【聖書箇所】 12章 3～8節

はじめに

● 前回は、ローマ人への手紙 12章 1～2節を通して「あなたがたのからだを神に受け入れられる生きた供え物としてささげなさい。」という神への献身について学びました。このことは、神の救いを与えられた者でなければ決してできないことです。神の恵みにあずかった者としての献身が勧められています。そしてこの「ささげる」ということが神に対する「霊的な礼拝」、つまり、当然の礼拝なのです。

● 今回は、3～8節の箇所を通して、キリストのからだなる教会における生きた交わりについて考えることになりませんが、やはり、この1～2節で扱われた「献身」という土台がしっかりしていないと、健全な交わりをつくり出すことはできないのです。神に対して、また信徒同志、また対社会的な関係において、具体的にどのようなかわりをもって生きるべきか、その根底にいつも問題となるのが、その人が神に対する献身をしているかどうかなのです。私という存在は、尊い代価を払って神に買い取られた者、私という存在の所有権は私自身ではなく、神であるという信仰にしっかりと立っているかということです。これがすべてのことをしていく上での土台なのです。

1. 私たちは交わりの存在である

● 現代における大きな問題の一つは、コミュニケーションの欠如であると言われます。科学の進歩、通信技術の発達にもかかわらず、人と人とのコミュニケーション、すなわち交わりはそれほど進歩していない、いやむしろかえって希薄になって来ていると言われます。夫婦の交わり、親子の交わり、そして多くの友人など、交わりの対象もその程度もみな異なります。「私には多くの友人がいます」という人がいますが、果たしてその中で本当に心を通い合わせることでできる友人はどれだけいるのでしょうか。

● イエシュアはこう言われました。「人はパンによって生きるのではなく、神の口から出る一つひとつのことでよる」と。これは、私たちがどんなに物質的なものがあっても、それによって生きることができないということを示しています。もし仮に、この世界にあなた一人が取り残されたとします。すべての物質的な必要は十分にあるとしましょう。食べるものも、着るものも、自由にどこへでも移動できる手段も、楽しむすべてのもの、欲しいと思うものがすべて与えられているとしましょう。あなたはそれで幸福でしょうか。

● おそらく、そのような環境的な生活に置かれた人は幸いであるどころか、耐えられなくなるはずですが、なぜなら、それは人間だからです。聖書によれば、神によって最初に造られた人は、エデンの園に置かれ、

ありとあらゆるものを手にしていました。「思いのまま食べて良い」世界でした。しかし神は、その人(アダム)に対して、「人はひとりであるのは良くない。わたしは彼にふさわしい助け手を造ろう」と言って、彼を深い眠りに陥らせ、彼のあばら骨を取って、もう一人の人、つまり女を造られました。そのとき、アダムは「これは私の骨からの骨」と言って、それまで満たされなかった心の空洞をはじめて満たすことができましたのです。

●私たちは交わりの存在です。うれしいことがあったら、そのことを分かってもらえる存在を必要としています。悲しい時も同じです。自分のことを理解し、受け入れてくれて、ともに喜びや悲しみを分かち合ってくれる人を必要としています。また苦しみや困難な時に、ともにその重荷を負ってくれる人を必要としています。また私たちが協力して何かを成し遂げるとき、すばらしい喜びを経験することができます。・・・このように私たちは交わりの存在であり、コミュニケーションを必要としている存在なのです。

●ところが、この交わりが人間の罪によって破られ、そのために人間は人との交わりにおいて、心を傷つけたり、反対に傷つけられたりする者となってしまいました。今日に見られる心の病いの多くが、交わりによってもたらされているのです。人間の罪とは、私たちが本来の(真の)交わりの相手である神を裏切り、背を向けている状態です。「人は神の口から出る一つひとつのことばによる」とあるにもかかわらず、罪によって、そのコミュニケーションを人間がみずから喪失してしまったのです。

●しかしあわれみ深い神は、御子イエシュアをこの世にお遣わしになり、失った交わりを回復してくださいました。ヨハネの手紙第一 1 章で、ヨハネは次のように言っています。

【新改訳改訂第3版】 I ヨハネ 1 章 1~4 節

- 1 初めからあったもの、私たちが聞いたもの、目で見えたもの、じっと見、また手でさわったもの、すなわち、いのちのことばについて、
- 2 —このいのちが現れ、私たちはそれを見たので、そのあかしをし、あなたがたにこの永遠のいのちを伝えます。すなわち、御父とともにあって、私たちに現された永遠のいのちです。—
- 3 私たちの見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝えるのは、あなたがたも私たちと交わりを持つようになるためです。**私たちの交わりとは、御父および御子イエス・キリストとの交わりです。**
- 4 私たちがこれらのことを書き送るのは、**私たちの喜びが全きものとなるため**です。

●私たちは、キリストとの交わりを通して、すばらしい喜び、満足が与えられるのです。「人がその友のためにいのちを捨てるという、これよりも大きな愛はだれも持っていません。」とイエシュアは言われました。そんな友がいるとは何とすばらしい事でしょうか。しかしイエシュアは文字どおりに、そのような友となってくださる方なのです。ですから、私たちはこの方を受け入れなければなりません。この方は、私たち人間のように不真実な方ではありません。決して裏切ることのない方です。また私たちの心を傷つけるようなことも決してなさらない方です。むしろ、私たちの真の理解者であり、傷ついた私たちの心をいやすことのできる方です。この方は「いたんだ葦を折ることもなく、くすぶる燈心も消すことのない」お方な

のです。この方と私たちが交わりを持つようになるとき、私たちは新しく生きる力が与えられるのです。なぜなら、私たちは交わりの存在だからです。そしてその縦の関係におけるイエシュアとの交わりは、横の関係におけるクリスチャン同志との交わりを可能にさせ、発展していくのです。共通の土台を持ち、共通の価値観と目的を持ちながら、経験を分かち合い、喜びや悲しみをともに共有しながら、互いの重荷を負い合います。愛をもってとりなしあって行く交わりです。

2. 真の交わり(健全な教会)を建て上げるために

●パウロは回復された交わりを、キリストをかしらとするからだにたとえました。これが教会のイメージです。教会とは建物のことではありません。すばらしい家(ハウス)に住んでいたとしても、家庭(ホーム)があるとは言えません。ハウスとホームは異なります。ハウスは建物であり、ホームは交わりです。とはいえ、交わりがあればハウスは要らないということにはなりません。それにふさわしいハウスも必要になります。しかし私たちにとって必要なのはホームです。そこには愛のある、生きた交わり、心の通い合いによる喜びと満足があります。子どもが学校でいじめられて帰って来たとしても、ホームがあるなら、傷ついた心は癒されます。ホームがあるところには一人としてその存在を無視されることはないのです。

●キリストのからだなる教会のイメージはハウスではなく、ホームのイメージです。家族です。ですから教会は見物人であったり、お客さんであったり、何か批判してやろうというような態度は教会に属する者ではありません。パウロはこの交わりが健全に建て上げられていくために、真の交わりのいくつかの必要条件について3~8節で教えようとしています(だいぶ前書きが長くなりましたが・・・)。

(1) 自分を正しく評価すること(3節)

【新改訳改訂第3版】ローマ書 12章3節

私は、自分に与えられた恵みによって、あなたがたひとりひとりに言います。だれでも、思ふべき限度を越えて思い上がってははいけません。いや、むしろ、神がおのおのに分け与えてくださった信仰の量りに応じて、慎み深い考え方をしなさい。

●ローマの教会には自分の存在を過大評価して、自分ほどすぐれた者はいないと自負していた者がいたのかもしれませんが。あるいは一般論としての見方かもしれませんが。しかしパウロは「思い上がってはならない」、謙遜であるべきことを勧めています。自分を過大評価している人があるグループにいる場合、必ず、人との調和が破壊されます。うぬぼれ(傲慢さ)が一番厄介です。「オレが、私がいなければどうなるんだ。オレが、私がいるから・・・ここまで・・・」という思い上がりは、すべての交わりを破壊する張本人です。自分の存在が、自分を評価する通りに受け入れられなければかわらないとするのは、傲慢としか言いようがありません。この罪から私たちが救われ、守られるためには、自分自身が神にささげられていなければなりません。私たちはあくまでも神の所有(もの)であり、ささげることがなければ、神に用いられるこ

とはできないからです。ある個人の努力、能力が神のわざをするものではありません。どんなに大きな樹木でも、目に見えない多くのものによって支えられているのです。

(2) 教会を正しく理解すること(4, 5 節)

【新改訳改訂第3版】ローマ書 12 章 4～5 節

- 4 一つのからだには多くの器官があって、すべての器官が同じ働きはしないのと同じように、
- 5 大ぜいいる私たちも、キリストにあって一つのからだであり、ひとりひとり互いに器官なのです。

●人のからだは非常にうまくできていて、どれひとつとっても必要ない器官はありません。それらがすべて有機的に働くとき、からだは健全と言えるのです。

(3) 自分の賜物を正しく理解すること(6～8 節)

【新改訳改訂第3版】ローマ 12 章 6～8 節

- 6 私たちは、与えられた恵みに従って、異なった賜物を持っているので、もしそれが預言であれば、その信仰に応じて預言しなさい。
- 7 奉仕であれば奉仕し、教える人であれば教えなさい。
- 8 勧めをする人であれば勧め、分け与える人は惜みまずに分け与え、指導する人は熱心に指導し、慈善を行う人は喜んでそれをしなさい。

●イエシュアはご自分の教会を建て上げるために、特別な賜物(能力)を一人ひとりに与えています。必要な能力はすでに救われたときに与えられているのです。そのことを信じますか。しかしここで問題となるのは、1 節のみことば、すなわち、自分のからだを神にささげていなければ、自分に与えられている賜物が何であるかを発見することはできませんし、それが用いられることもないのです。

●たとえば、超教派的な集まりでは、このことが非常に重要になって来ます。皆が皆、事務的な働き能力が与えられているわけではありません。事務局とか、総務に求められる賜物は管理能力です。常に、全体に気を配り、調整する賜物です。また他に働きをゆだねる能力です。ひとつの部門にしても、全体をコーディネートする管理能力の賜物、指導する賜物、賛美の賜物、練習のスケジュールを調整し、人の目には見えない縁の下の力もちとして、文句を言わず、忠実に仕えてくれる奉仕の賜物が必要です。それぞれが自分に与えられた恵みの賜物に従って、神にそれをささげるのです。そしてそれぞれがいたわり合うことによって力をまとうのです。伝道的な大会では、福音を語る人が必要です。この賜物もだれにでも与えられているわけではありません。

●I コリント 12 章で、「からだの中で比較的弱いと見られる器官が、かえってなくてはならないものなのです」と断言しているみことばに、心正される思いがします。神は、劣ったところをさらに尊んで、か

からだをこのように調和させてくださったのです。それはからだの中に分裂がなく、各部分が互いにいたわり合うためです。つまり、調和剤としての賜物があるということです。

●教会のかしらであるキリストは、それぞれ異なった賜物を与えておられます。私たちが自分でそれを求めることはできません。与えられた賜物を正しく理解し、管理し、それを神の栄光のために活用して行くことを求めておられます。神から見ると、ひとりひとりがなくてはならない尊い存在なのです。主は交わりの中にご自身を現わされます。教会が生きた交わりのある教会として成長できるように祈っていきたいと思います。そのためにも、私たち一人ひとりが、新たに、神の所有の民として自分のからだと心とをささげたいと思います。主の栄光が現わされるために。

1995.5.21